

人類に対する愛情

グルマーイについての話

バースデーブリス(誕生日の至福)を祝って

グルマーイの話 1

ガリマ・ボーワンカー

それは 1984 年 10 月、グルデーヴ・シッダ・ピートゥでのことでした。インド中、そして世界中から何千人ものシッダ・ヨーギが、精神修行やバーバ・ムクターナンダのマハーサマーディを祝う神聖な儀式に参加するために、アーシュラムを訪れていました。7 日間継続してチャンティングを行うサプタが、現在フリダイディープとして知られているグル・チョークで行われ、ヤグニャ・マンドップではヤグニャの儀式が行われていました。

これらの吉兆な行事に参加する信奉者たちを満載したバスが、毎日到着しました。すべての信奉者を収容するために、アーシュラムの正門の向かい側にある広い土地に巨大なテント村が設立されました。これはチトラクトゥ・シティーと呼ばれました。チトラクトゥ・シティーには多くのテントが張られ、最も大きなテントには 200 人が収容できました。

至福に満ちたサプタのチャンティングの響きは、昼夜を通して辺り一面に浸透していました。サプタがグル・チョークで続いていたある遅い晩のこと、ほとんどの人はもうすでに休んでいました。私は数人のセーヴァイトと共に宿泊部門のオフィスのアヴァス・ニヴァスにまだ残っていました。私たちはチャンティングを聞きながら仕事を仕上げていました。その時、突然パラパラと雨が降り出した音がしました。私たちは信じられずに顔を見合わせました。モンスーンの季節は何週間も前に終わっていたからです。少なくとも私たちはそう思っていました。通り雨であってほしいと願いながら、私たちはバルコニーに走りました。ところが困ったことに、それは絶え間ない小雨になると、見る間に激しくなっていました。何百人という人たちがテントの中で寝ています。その人たち全員を移動させなくてはならないことに気がつきました。しかもすぐに。と

いうのも、テントは防水ではなかったからです。私たちは、たくさんのセーヴァイトの助けがいることにも気づきました。それもすぐに！

このことを話し合っていると、グルマーイがアヴァス・ニヴァスのオフィスに入ってきました。「チトラクトゥに宿泊している人全員を移動させなくてはなりません」と、グルマーイは言いました。彼女は一人のセーヴァイトに、中庭に行って誰でも見つけた人すべてに移動するのを助けに来てくれるよう頼みなさいと言いました。

すぐに、私たちは行動に移りました。このことが伝わるにつれ、人々がどんどん手伝いに集まってきました。グルマーイ自らが采配を振るい、各チームがそれぞれ異なった任務を行いました。あるチームはチトラクトゥにいる人たちが荷物をまとめるのを手助けし、他の人たちは濡れていないマットレスをテントから集め、またあるチームはアーシュラム中を回って、使っていないマットレスを見つけ出せる限り集めて来ました。

グルマーイは、グル・チョークの階下にあるインテンシヴ・ホールと、居住用の建物であるムクテーシュワル、シッデーシュワル、そしてニッテーシュワルの廊下の至る所にマットレスを敷き始めるように指示しました。誰もが協力して、必要なことを成し遂げました。グルマーイ自身もセーヴァイトと一緒にマットレスを運び、廊下に敷きました。

チトラクトゥから人々が来始めました。彼らが新しい寝床に案内される中、グルマーイはその間を歩き、大丈夫かどうか、そして何か必要なものがないかどうか優しく聞いて回りました。

私は、人々が涙を浮かべてナマステーに手を合わせ、感謝して頭を下げるのを目にしました。彼らは、真夜中に自分の愛するグルが自分たちのためにマットレスを運んで敷き、大丈夫なことを確認してくれることに、心が溶けるようでした。皆が快適であるかを心配するグルマーイの

愛と心遣いに、誰もが胸を打たれていました。グルマーイに対する感謝と敬愛は、彼らに対するグルマーイの深い愛と同じように明らかでした。

チトラクトゥ・シティーからの最後の人が屋内に案内されると、グルマーイはこの作業をやり遂げるために夜を徹して働いたセーヴァイトの皆に感謝しました。彼女は私たちに向かって大きな笑顔を浮かべると、優しく手を振ってその場を去りました。

既に夜明け近くでしたが、私たちは皆、信じられないほどのエネルギーに満ち、一晩ぐっすり眠ったかのように元気でした。私たちはオフィスに戻ると、しばらく静かに座り、オフィスに流れてくるマントラの音がサプタに集まる人が増えるにつれてどんどん強くなる中、その夜の優しさに浸りました。もちろんその頃には、夜通し愛と祝福を私たちに降り注いだ雨はやんでいました。

グルマーイが一人一人に与える大きな愛と思いやりを直接目撃した私は、グルの心の偉大さを垣間見ました。これこそがグルの本質、プレーム・カ・サーガラ、つまり愛の大海です。

グルマーイの話 2 スワーム・イーシュワラーナンダ

1986年、グルマーイはインドのグジャラート州での「教えの旅」のツアーを始めました。すべての大都市で、彼女は大規模なサツァングを行い、毎回、何千人もの信奉者や好意を寄せる人々が出席しました。グルデーヴ・シッダ・ピートゥに帰る途中、グルマーイはシッダ・ヨーガ瞑想センターのリーダーたちの招待を受け、ある小さな村でサツァングを開きました。

その村には、シッダ・ヨーガの生徒はほんの少数しかいませんでした。でも、グルマーイの訪問のニュースが広がると、村人全員が繰り出して彼女を歓迎したいということになりました。

彼らは村の広場を旗と花輪で飾り、広場の真ん中にグルマーイの椅子を用意し、その周りにみんなが座れるようなスペースを設けました。村人たちはまた、たくさんのココナツを収穫し、グルマーイと彼女のツアースタッフに新鮮なココナツウォーターを提供できるように準備しました。インドでは、これは尊敬される来客を歓迎する伝統的な方法です。

グルマーイが到着し自分の席に着くと、村人たち全員がその周りに集まりました。深い献身の心を込めて、2人のセンターリーダーが前に進み出て、彼らのグルをココナツウォーターで迎えました。グルマーイはほほ笑み、こう言いました。「どうか、まず私のスワミたちにココナツウォーターをあげてください」。センターリーダーたちはうなずき、グルマーイの希望通りにしました。

それから、彼らは2度目のココナツウォーターをグルマーイに持っていきました。グルマーイはこう言いました。「どうかまず、この長い旅路につきあってくれたツアースタッフにココナツウォーターをあげてください」。2人のセンターリーダーはうなずき、グルマーイのスタッフ一人一人にココナツウォーターを渡しました。

センターリーダーたちが3度目のココナツウォーターを運んできた時、グルマーイはこう言いました。「ここにいる村人たちは非常に多くのセーヴァーをしてくれました。みんな喉が渴いているに違いありません。どうか、みんなにココナツウォーターが行き渡るようにしてください」。このようにして、村人全員が新鮮でおいしいココナツウォーターを受け取りました。

最後に、センターリーダーたちが戻ってきてこう言いました。「グルマーイ、みんながココナツウォーターを受け取りました。今度はあなたにささげたいのです」

グルマーイはほほ笑み、首を横に振りました。彼女はこう言いました。「誰かを忘れていますよ」。2人のセンターリーダーは困惑しました。彼らは「誰を忘れたんだろう」と言いながら、ホールを見渡しました。グルマーイは言いました。「あなたたち自身を忘れていますよ。さあ、ココナツウオーターを飲んでください」。センターリーダーたちはグルにナマステーをして、グルマーイのプラサードとしてそのココナツウオーターを飲みました。

彼らが飲み終わるとすぐに、グルマーイはこう言いました。「ああ。みんなの心が満たされたので、私も満たされました」

この日、私はグルの心を垣間見ることができました！



© 2017 SYDA Foundation®. 著作権所有。